

# 研究

## 『幼稚園』の原著者

をさなほのその

### ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 1

インゲグロレ(史学博士)

ディーター・レドナック(史学博士)

翻訳／ベルガー有希子(公立幼稚園教諭)

解説・写真提供／大戸美也子(幼児教育史研究者)

連載にあたって

わが国最初の幼稚園である東京女子師範学校付属幼稚園の開業に先行して、明治九年一月に『幼稚園 卷上』が文部省から出版された。本書は、幼稚園の創設者F. フレーベルが創案した教育玩具である恩物と手技の取り扱い、及び遊戯等を図入りで解説した幼稚園教育の手引書である。草創期の幼稚園教育の実践者にとって極めて重要な参考書であったことは、最初の保姆・豊田英雄の遺した伝習記録(『代紳録』)等からも裏付けることができる。本書について、これまでさまざまな角度から検討が加えられてきたが、原著者のロンゲ夫妻については日英米の文献を探っても断片的あるいは正確さを欠く情報しか得られない状況にあった。ところが、意外なところベルタ・ロンゲ夫人(以下、ベルタと表記)をめぐるさまざまな情報が眠っていたのである。昨年六月、筆者はベルタのルーツを探るためにハンブルグ市を訪れた。その時、通訳の労をとってくださったベルガー有希子さんが、ベルタの父親である実業家CH Meyer(以下、マイヤー氏と表記)の資料館の存在をつきとめてくださった。ところが、追いかけるように資料館の担当

大戸美也子(おおとみやこ)

長年、保育者養成・現任保育者の再教育に従事。近年は、幼稚園教育導入に関する日英米の比較研究を展開。

者から、資料館は二〇一二年一月に焼失したこと、その代わりに資料館の資料を使ってマイヤー氏について著書を著わしているディーター・レドナツク博士を紹介したいとの連絡が入り、六月上旬、ハンブルグ市でレドナツク博士との出会いが実現したのである。この日、レドナツク博士は、「マイヤー氏の娘たちのことは、こちらが詳しい……」と、女性解放運動史を専攻するインゲ・グロレ博士を同伴して現れた。二人は、早速、私たちをマイヤー家の資料館の焼け跡へ案内してくださり、焼け跡から持ち出されたままの雑多な資料の中からマイヤー氏や子どもたちに関する資料を選んで指し示しながら私の疑問に次々答えてくださったのである。その後、マイヤー氏の興した工場や水路、あるいは別邸など現存している諸施設を実際に見て回り、その道々ベルタをめぐるさまざまな「秘話」まで聞かせていただく恩恵に浴したのだった。

レドナツク氏もグロレ女史も、幼児教育界とはまったく接点を持つことなく、それぞれ独自に『幼稚園』の原著者ベルタの父親やベルタ姉妹が積極的に参加したハンブルグの女性解放運動について調査研究を進めてこられた。幼児教育関係者がお二人の研究成果を共有できれば、幼稚園の世界的展開の先駆けとなったベルタに関する不透明な部分を照らし、幼児教育史に新しい情報をもたらすことは明らかである。そこで、筆者は『幼児の教育』編集委員会に彼らの論文掲載の検討をお願いし、ここに実現する運びとなったのである。

ベルタが生きた時代から一世紀半を経て、女性の社会的地位も幼児期の教育もはるかに向上した。しかしながら、女性の幅広い社会的進出を求め、また質の高い乳幼児期全体の保育と教育への要求ははるかに大きくなり、かつてベルタ等が為した挑戦と努力は、現代社会にあつてもさらに力強く継承しなければならぬものである。本連載がそのような継承の力の糧になれば誠にありがたいことである。

(大戸美也子)

## ベルタと幼稚園教育との出会い

— ハンブルグでの幼稚園教員養成講座に参加

インゲ・グロレ

翻訳／ベルガー有希子



一八四八年、ヨーロッパに「国民の春」が訪れ人々は自由を謳歌したが、女性たちもまた次々に画期的な活動を始めた。

「ハンブルグ市では、社会的な壁を少し取り除き、女性解放につながようとする同志的な女性たちの小さな組織が誕生した……」

これは、一八四八年四月に結成された「ソーシャル協会」(Sozialen Verein)の議事録の冒頭の一節である。この協会結成で意義深いことは、必ずしも親しい関係にはなかったユダヤ教徒とクリスチャンの女性を会員としたことであった。彼らは、「女性解放」や「ヒューマニズム」あるいは「倫理観」など

に、共通の考え方を持ってはいしたが、互いの文化や生活習慣については全く無知であった。ところが彼らは宗教的偏見や社会格差を克服しようと志を一つにしたのである。

### 「ソーシャル協会」の誕生

この協会は、はじめヨハンナ・ゴールドシュミット夫人(一八〇六一—一八八四)の自宅で会合をもった。彼女は、裕福な改革推進派の商人モリッツ・ゴールドシュミットの妻であり、八人の子どもたちの母親であった。父親のマルクス・ヘルツ・シュバールは、ハンブルグ市の「新イスラエルテンプル協会」

Inge Grolle(インゲ グロレ)

長年、歴史教科書作成に携わる。ハンブルグ女性解放運動研究者。

の発起人の一人として厳格なオーソドックス・イスラエル教区からの分離を図った人物である。

ゴールドシュミット夫人は、自由で開放的な雰囲気の中で育つたため、自分の子どもたちにも自分と同じような環境で育てようとした。しかし、当時はユダヤ人というだけで、差別や制約を受けていたのがあった。こうしたユダヤ人の虐げられた状況をハンブルグ市民に伝えるために、『レベッカとアマリア―ユダヤ婦人と上流婦人の間にかわされた時事問題や人生問題についての往復書簡』という小説を著わした。この本は、予想通りキリスト教の読者の間で好評を得、特に上流階級の女性たちで構成する「ドイツカトリック運動を支援する婦人団体（一八四六年十二月結成）」の反響は大きかった。

ドイツカトリック教は、自由でキリスト教の宗派から離れて教義上の強制や聖職階級の無いドイツナショナル教会を目指し、すべての教会員は、たとえ女性であっても同じ権利が与えられていた。ハンブルグ市に新設されたこの自由教団の会員たちは、収

入源として寄付に頼っていたため、女性たちはバザーを企画し呼びかけた。このような企画を一致団結して実施することで、彼女らは自分たちが社会的にも何らかの役割を果たせようだと自覚するようになっていった。そして、週一回意見交換の会合をもつようになった。この「ドイツカトリック教会を支援する婦人団体」の会員の中に、進取の気性に富む実業家H. C. マイヤーの娘たちがいた。中でも長女のアマリエ・ヴェステンダルフ夫人は、ハンブルグのユダヤ人差別の話に強く心動かされ、著者のゴールドシュミット夫人を自分たちの団体の会合に招くことにした。このようにして両者はつながり、ユダヤ教徒とクリスチャンの女性が一緒に会合をもつという前代未聞の「ソーシャル協会」が誕生したのである。

新しい「ソーシャル協会」の会合は、会員の自宅で十四日ごとに持ち回りで行われた。はじめ、二つのグループにはよそよそしい雰囲気があったが、やがて共通のテーマ、子どもへのかかわり方や教育に

関するテーマを見いだしていった。会員のエミリエ・ブステンフェルド夫人は、子どもたちのために午後に「集会」を立ち上げ、これにより女性たちはお互い打ち解け、広く「時事問題や人生の問題」についても意見交換するようになっていった。

### 「ソーシャル協会」の活動目標をめぐる葛藤 — 幼稚園開設か、女子大学開設か

一八四九年二月二十一日に、ハンブルグ市議会はユダヤ人の市民権を認めたため、それまでユダヤ人に禁止されていた職業選択も可能になった。ソーシャル協会員は喜びに沸き、一八四九年三月四日には、ブステンフェルド夫人がユダヤ人姉妹のために祝賀会を開いた。この席上、ヴェステンダルフ夫人はこの活動の持続的発展を願って、素晴らしい提案——ハンブルグ市に幼稚園を創設し、幼稚園の生みの親であるF. フレーベルを招くという提案をしたのであった。この提案は、全員一致で可決し、幼稚園の普及が「ソーシャル協会」のはっきりとした目標とな

っていった。幼い子どもたちに自由でありながら系統だった働きかけをすること、あるいは母親の育児の質を重視するフレーベルの考え方は、女性に社会参加への途を拓くものだった。育児が、次世代にかかわる重要な社会活動であったからである。F. フレーベルは、「子どもの養育は、人間の養育である」と説き、それこそが国民の使命としていた。女性たちは、フレーベルの保育理論の根底にある革新的で先見的な考えを見抜いていたといえよう。そのことは、一八五一年に反動主義のプロイセンで幼稚園禁止令が出されたことからもうかがえる。

ゴールドシュミット夫人は、協会とF. フレーベルとの連絡係となった。フレーベルもまた、「遊ぶ子どもへの関心を共有しながら、ユダヤ教徒とクリスチャンが社会的に接近すること」を歓迎した。そして、ハンブルグで幼稚園の教員養成講座を半年間実施することを承諾したのであった。

しかし、フレーベルとの交渉は難航した。一つには、彼が小さな協会が支払える以上の報酬を要求し

たからである。さらには、ドイツカトリックの宗教政治運動のカリスマ指導者だったヨハネス・ロンゲの支持者たちの間から女子大学開設の動きが出てきたことも障害となった。学長としてF. フレーベルの甥、K. フレーベルが候補に上っていた。K. フレーベルとロンゲは、女子大学構想を打ち上げ、女性に高等教育を与え、この近代的な教育機関で自由主義の保育を基礎とする「家庭内の職業教育」を狙ったのだが、チューリッヒでの彼の試みは必ずしも成功してはいなかった。ところが、F. フレーベルの愛弟子だったアマリエ・クリューガーが、K. フレーベルをハンブルグの女性たちに取り次いだのである。アマリエは、大学教育と幼稚園教育とは根が一つであると確信してこの二つを同じ場所、つまりはハンブルグに設置することを強く望んだのである。しかし、F. フレーベルは、女性の大学教育には懐疑的であったから、甥と争い、同じ場所で活動することを拒んだのであった。

一方、ハンブルグの若い女性ブステンフェルドと

友人のH. C. マイヤーの二女ベルタ・トラウン夫人<sup>注2</sup>とは女子大学構想に魅了され、K. フレーベルの人物と彼の計画を知るために二人はチューリッヒまで出かけ、ハンブルグへ戻ると、今度は女子大設立計画を熱心に伝え全力を尽したのだった。しかし、大学開設のためには、資金提供を誰に依頼し、教授陣をどうするか、また大学入学者の宿舍をどうするかなど、検討しなければならぬことが山積していた。時間は迫っていた。というのは、革命が失敗すれば革新のための好機を逃がすかもしれないのである。素早いエネルギーな行動だけが、この計画の実現に必要なだった。「ソーシヤル協会」の仲間から、ブステンフェルドとトラウン両夫人の独断行為に対して非難の声も出てきた。

幼稚園と大学のどちらを優先すべきか？ ゴールドシュミット夫人は、二人に欺かれたような気がした。彼女は、リーベンシュタインでF. フレーベルと会い、すでに彼の考えに賛同していたからである。ゴールドシュミット夫人は、母親として幼稚園の存

在に確信を持っていたので、フレーベルの精神に基づき保育の手引書を著わした。この本は、驚くほど現代的な原理を含んでいた。F. フレーベルの考えを伝えようとする彼女の願いは、女性の高等教育を望む協会の妨げを受けるのだろうか？ 二人のフレーベルを結び付けようとしたクリューガーの働きかけは何の効力を持たず、F. フレーベルは和解を拒み続けた。しかしながら、ゴールドシュミット夫人は、F. フレーベルに窮状を上手に説明し、彼の要求はすべて受け入れられたのである。

革命の初期段階では、新しい活動が交じり合うことはよくあることだ。どの考えが実現可能で適切であるかどうかは、続けていくうちに明らかになっていくものである。一八四九年十月三日の「ソーシャル協会」の会合で、ゴールドシュミット夫人は、F. フレーベルが考えを変えてハンブルグへ来てくれることを伝えた。F. フレーベルは、冬の半年間、二十二人の受講生を対象に幼稚園の教員養成講座を開

き、また労働者教育協会の講堂に、あらゆる社会層の子どもたちが通える最初の市民幼稚園を開き、翌一八五〇年一月一日には女子大学註3も開校された。

幼稚園は、永遠に続く宿命にあったといえる。現に、幼稚園は今なお世界中に存在している。ゴールドシュミット夫人は、その後もブステンフェルド夫人と女子教育の基本をめぐって衝突を繰り返した。しかし、結果的にはこの個性の強い二人の女性は、キリスト教徒とユダヤ教徒からなる小さな協会が目指した目標、「社会的差別と先入観の撤廃」の達成に多大な貢献を果たしたといえるのではないだろうか。

#### 注

1 バッド・ブランケンブルグのフレーベル博物館に、幼稚園の普及に貢献した五名の女性が紹介されているが、彼女はその一人である。一八六〇年に「ハンブルグフレーベル会」を創設。

2 マイヤー家の二女ベルタは十六歳でトラウン氏と結婚。一八五〇年に離婚し、ロンドンへ移住。翌年、ロンゲ氏と再婚した。

3 マイヤー家の五女マルガレータはこの大学の一期生で、後にロンドンに開設した姉ベルタの幼稚園を手伝った後、シュルツ氏と結婚しアメリカへ渡り、最初の幼稚園を開設した。